

2012年2月

沖縄セミナー報告

沖縄と連帯する富山共同行動

共同代表 山崎 彰 (富山平和運動センター)

埴野 謙二 (生・労働・運動ネット)

TEL 076-441-7843 FAX 076-444-6093

沖縄セミナー・2011 第4回 川音勉「沖縄の『自己決定権』との連帯を模索する」(2012・1/15)での論議を振り返る

2012年1月15日(日)の「沖縄セミナー・2011」の第4回では、「沖縄文化講座」といった沖縄での動きをめぐる活発な論議の場を創りだすことを通じて、この間の沖縄での「自己決定権」の樹立を求める動きに対して、ヤマト(日本本土)の側がいかにか「応答」するかを模索している川音勉さんを話し手に迎えて、表記のような集いを行いました。以下、そこでの川音さんの話と、その後の「フリートーク」での論議のアウトラインを紹介します。

沖縄の「自己決定権」との連帯を地域から模索する——川音勉さんの話から

□ヤマトの地域から沖縄と向きあう

まず最初に、私が普段どのような活動をしているのか、ということからお話すると、この間、私は「沖縄文化講座」という名前で、数名の仲間と共に東京で一連の講演会やシンポジウムを企画しながら、そこでの論議を記録に残していくことを行っている。その他に、私は「沖縄講座」というグループにも関わっているが、その正式名称は、「沖縄の自立解放闘争に連帯して反安保闘争を闘う横浜市民講座」という非常に長いものだ。それと「沖縄文化講座」とはメンバーも重なっているし、出入りも自由なのだが、「沖縄講座」の方は、横浜市の自治体職員を中心とするグループで自治労横浜支部の後援も受けている。私は「沖連」という運動体の一員でもあるが、そのメンバーの中には、かつての「三派全学連」の副委員長で、現在、地元の静岡で不動産屋をしている成島忠夫もいる。彼のような私の先輩に当たる世代で「9条改憲阻止の会」に加わっている人たちの一部が、沖縄連帯の運動を私たちと一緒にやろうということになったのだが、「沖連」は、そうした共同行動のためにつくられたものだ。

今日の進行の方から「沖縄セミナー」での話を依頼されたのが一昨年暮れのことで、その時には、大体、今言ったような動きの報告を軸に話せばいいだろうと考えていた。しかし、「3・11」以降、それまで考えていたことが、全て「ご破算」になってしまった。3月11日の東日本大震災では、私は自分が勤めている福祉作業所の仮設のプレハブ小屋にいて、揺れはひどかったが、ほとんど被害はなかった。ただ、その日の内に流れた福島第1原発の「全電源喪失」のニュースからも、原発がすでに非常に危険な状態になっていることは分かっていた。その後、相次いで起きた原発の爆発の映像も、「やっぱり、こうなったか」という思いで見えていたが、子どもが既に独立して別居しているので、し

ばらくの間、カミさんと二人で「これが本当に『最後の晚餐』だね」と言いながら、酒ばかり飲んでいるような気力が湧かない状態が続いていた。

しかし、そうではあれ、「東電前アクション」を行ってきたフリーター全般労組の園良太さんや、昨年 6 月の「沖縄セミナー」の話し手であり、沖縄に連帯する「新宿ど真ん中デモ」を進めてきた大野光明さんといった若い人たちの動きにも励まされて、この間、何とか自分のペースを取り戻してきている。「3・11」以降、日本社会の中に大きな「断絶」が生じているように思うが、今、私としては、福島への支援・連帯ということの中に私たちが改めて沖縄と向きあうことへの道筋があるのではないかと考えている。実際、原発を稼働・再稼働させようとする日本政府の動きに反対して経産省本館横のスペースを「占拠」している「経産省前テントひろば」では、私よりも 10 歳以上年配の「9 条改憲阻止の会」のメンバーたちがテント内で寝泊まりしながら、そこを守ってきている。同時に、そのことによって、福島の女性たちがアクションを起こすことを促してきたということがある。

沖縄とヤマトをいかにつなぐか、という今日の私の話のテーマに即して言えば、沖縄というところは労働組合のルートを通じれば、非常に入りやすい。自治労や日教組、また、沖縄は観光業が盛んなので観光労といったルートで沖縄に入れば、同じ仕事をしている仲間同士だということで、非常に友好的に歓待してくれる。しかし、沖縄の場合は、そうした労働運動的な連帯の枠組だけでは捉えきれないような、例えば、米軍基地の問題があるし、「民族的」とまで言っているのかどうかは分からないが、歴史的・文化的な面でヤマトとの「差異」が大きく存在している。そのような意味でも、やはり、沖縄とヤマトの中の「ローカル」な地域が互いに出会うことができるか、ということが、問われなければならないだろう。その場合、まず、日本国家があってその下に同じように地域が並んでいるといったように、地域というものを一括りにして考えるのでは限界があるのではないかとというのが、私が日頃、感じていることだ。

戦前の日本では国家が任命した「官選知事」を地方に派遣するという形になっていたが、戦後間もない時期から、まがりなりにも選挙という民主的な手続きによって住民自身が知事を選出できるようになった。その際に、沖縄ではどうだったか、ということをおぼえてはならないのではないかと。沖縄では、1945 年から 1972 年まで米軍の施政下に置かれていて、その中で形成された固有の政治構造があったのだが、それは日本本土の戦後政治システムとは大きく異なるものだった。日本本土の場合、アメリカによる占領政策の一環として、戦後の混乱の中で住民自身による首長選挙が行われて、市長や村長、知事が新たに選ばれることで「下からの民主主義」が定着していった、という話が各地に残っている。

しかし、沖縄では、沖縄が米軍に占領された 1945 年から、1968 年の主席選挙で屋良朝苗が琉球政府の初めての公選主席に選ばれるまでの 23 年もの間、米軍の指名によって主席が決められていた。そのように、沖縄の民衆は、アメリカの軍政下での「独裁」的な政治体制を自らの手ではねのけて琉球政府主席の公選制を実現したという、本土にはない闘いの歴史をもっている。その違いというのは、とても大きなことであるだろう。

□ 沖縄と東アジアの〈視線〉から福島を見る

今日の私の話の資料として、「沖縄タイムス」という沖縄の地元紙の社説のコピーをお配りした。その中でも特に注目して欲しいのは、今年の 6 月 25 日付の社説だ。その論者は、「福島第 1 原発事故の発生以来、原発と米軍基地との類似性がさまざまな点から指摘される」と言う一方で、両者の決定的な違いとして、「原発稼働を目指す政府は、立地自治体の了解を得ようとしている」のに対して、

「辺野古移設は一方的な『伝達』を繰り返すだけだ」ということを指摘している。それはまさに事実だと認めざるを得ないし、私たちとしては、その違いは何によるものなのか、を考えないわけにはいかない。

そのことを考える際の重要な視点として、間違いなく、日米安保体制下の日本国家にとっての沖縄の米軍基地の役割ということがあるが、その一方で、近代以降の日本国家にとって沖縄とは何であったか、ということを見落としてはならないだろう。そのように、現在の世界の政治的・軍事的な構造と歴史性との両方の視点から見ることなく、「沖縄と福島は共に中央から差別され続けてきた地域だ」と言うだけでは、表面的な理解に留まってしまうように思う。今さら言うまでもなく、沖縄と福島には共通して「国内植民地」的な要素があるわけだが、同時に、そうした歴史性も含めて両者の違いをきちんと捉えなければ、深い意味での連帯は成立しないのではないか。

「沖縄タイムス」紙上で「対談シリーズ・国策を問う—沖縄と福島の 40 年」という連載のインタビュー特集が組まれるほど、沖縄では福島への共感・関心は深いし、実際に多数の福島原発事故の被災者を沖縄で受け入れている。その「対談シリーズ」の第 1 回では、「フクシマ論」(青土社)の著者として注目されている若手の社会学者の開沼博へのインタビューを、昨年 12 月 19 日と 20 日に連続して掲載している。彼の「フクシマ論」を私もさっと読んでみたが、現地にも何度も足を運んでしっかりと調べて書かれた本だ、という印象を受けている。

「沖縄タイムス」のインタビュー記事で、彼は、郷土の発展を願って福島原発を受け入れた地元の多数の人たちの思いを反原発運動の側は断罪すべきではない、と言っている。そうした視点は、確かに大事なことではあるが、ただ、彼の場合にしても、日本国家という政治的な枠組みの中で沖縄と福島が「地域」として同じように存在しているわけではない、ということに対してあまり自覚的ではないように思う。

「フクシマ論」では、福島の歴史に深く分け入って、戦後、福島の貧しい地域の住民が地元の発展の「夢」を託して原発を誘致するに至るまでの軌跡が克明に描かれている。そのように、原発を本気で止めようとするならば、地元で生きてきた住民の一人一人の「物語」にまで踏み込んで議論していかなければならないだろう。昔からよく言われていることではあるが、原発が建っている現地の運動と電力の大消費地である都市の運動とをどのように結合させるか、また、現地で原発反対の声を上げる少数の人たちをいかに孤立させないかを考えなければ、反原発運動は決して成功しない。そうした意味でも、開沼博の「フクシマ論」は様々な示唆に富む本であるように思う。

ただ、当然のことではあるが、運動をいかに進めるか、ということまで含めて彼が提起しているわけではない。一挙に多数派を形成したり、原発推進という「国策」を即時撤回させるということが困難である以上は、まず、地域の中で少数の反対派であることから出発して運動を積み上げていくしかないだろう。沖縄での反基地闘争の歴史の中でも、50 年代半ばの「銃剣とブルドーザー」による米軍の土地の強制接収に対して、伊江島の人たちは、那覇の琉球政府庁舎前から出発して沖縄本島を巡回しながら、米軍の非を訴えた「乞食行進」を行っている。そこには、これ以上後には引けないという、土地を失った人々の切迫感が込められていたはずだが、そうした直接行動を地域で粘り強く展開し続けていくことの蓄積の上にしか、運動の新たな展望が見いだせないように思う。そのような思いから、私も、この間、「沖縄—東京」という軸を立てて、調布市から世田谷区にかけての東京の中の私鉄沿線の「ローカル」な地域で、沖縄連帯の運動を行っている。

開沼博が「フクシマ論」の中で展開している論議にもう少し付け加えて言えば、日本の近代・現代史に照らして福島のポジションを考えることが必要なのではないか。福島を含めた東北地方は、戦前の日本国家が経済的・軍事的に成長していくための食料や労働力、また、兵隊となる人材といった「資源」を供給する「国内植民地」的な地域であったことがよく指摘されているが、開沼博も、同様の

指摘を行っている。それでは、そうした東北からの「資源」はどんな目的で利用されたかと言えば、それは明らかに、日本がアジア諸国に対して帝国主義的な侵略を行うためだった。

そのように、日本国家に侵略・占領された沖縄や、朝鮮、中国の民衆の〈視線〉から東北の人たちが何のために収奪・利用されたのかを見ることで、戦後の福島と中央の政府との関係だけでは分からない部分が、改めて構造的に浮かび上がってくるのではないか。そういったことまで含めて考えなければ、日本国家にとっての沖縄と福島のポジションの違いということは、きちんと捉えきれないように思う。

□「来るべき自己決定権のために」シンポを機に沖縄連帯へ更なる一歩を進める

2008年5月、那覇市の沖縄県立美術館で、シンポジウム「マーカラワジーガ：来るべき自己決定権のために——沖縄・憲法・アジア」が開催された。「マーカラワジーガ」というのは、沖縄の言葉で、「どこから怒りをぶつけたらいいのか」というような意味だ。そのシンポジウムには川満信一さんもパネリストとして参加していたのだが、彼が1981年の「新沖縄文学・第48号」に発表した「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」の思想的な意義を改めて確かめようということが、そこでの大きなテーマとなっていた。そのように、沖縄の日本「復帰」前後に展開された「反復帰」思想を経て生み出された「琉球共和社会憲法」を沖縄の〈思想的資源〉として捉えなおすということが、この間の沖縄での「自立／自己決定権論」をめぐる論議の1つのベースとなっている。そのシンポジウムでは、在日朝鮮人で植民地時代の朝鮮文学の研究者の崔真碩(ちえ・じんそく)さんの他、中国からも日本政治思想研究家の孫歌さんをパネリストに迎えたが、そのことによって沖縄の状況を東アジアの視点から捉えなおすといった論議の広がりが見られていたように思う。

そのシンポジウムの準備を進めるに当たって私も協力したのだが、その際に、知識人だけではなく、ぜひ、沖縄の運動現場の人たちからの発言も入れて欲しい、ということの主催者側に強く要望した。思想・言論の分野と運動の現場とは、どうしても乖離しがちなところがあるが、それは沖縄でも同様で、知識人の人たちは口では良いことを言っているけれども、運動の現場に来ないではないか、という批判の声がないわけではない。ただ、約130万人の人口の沖縄社会の中で知識人が食べていくというのは大変なことで、言論活動と実際の運動の両方を追求するというのは、生やさしいことではない。それならば、沖縄の知識人と運動の現場で闘っている人たちとを結びつけるために、私のような沖縄の「外」の人間が動いてもさしつかえないのなら、できる限りのことはしようということになった。そうした経緯で、シンポジウム「来るべき自己決定権のために」では、普天間基地「移設」攻撃がかけられている辺野古や、ヘリパッド建設予定地の高江の現地の人たちからのアピールが行われ、会場の参加者からの支援のキャンパも集まった。

川満信一さんの「琉球共和社会憲法 C 私(試)案」が掲載された同じ号の「琉球文学」には、仲宗根勇の「琉球共和国憲法 F 私(試)案」も掲載されていた。そういうものが本当にこの世界に存在するかということはあるだろうが、「琉球共和国」ではなく、「琉球共和社会」を構想しようとするに現在の自分たちにとっての大きな思想的な意義があるはずだ。そうした〈思想的資源〉としての川満信一さんの「琉球共和社会憲法」を東アジアのレベルにまで拡大していきたい、といった論議が、シンポジウムの終了後も継続的に行われていた。その背景には、川満信一さんが、冷戦体制の初期に住民の大量虐殺が行われた韓国の済州島の歴史に沖縄の状況と共通する部分を見いだして、その人たちとの交流を進めてきたということがある。

今年 2012 年は、沖縄の日本「復帰」40 周年ということになる。昨年 12 月に仲里さんに会いに沖縄に出かけた時には、「復帰」40 周年をどのように迎えるかについてまだ特に話が出てはいない、ということだった。ただ、「沖縄タイムス」の今年の新年号を見ている、「復帰」40 年の特集記事がたくさん載っているのも、もう少し時間が経てば沖縄からいろんな動きが出てくるはずだ。

それと関連させて「沖連」としても活動を考えているが、その一環として、元宜野湾市長で沖縄知事選立候補者の伊波洋一さんや、沖縄平和運動センターの山城博治さん、沖縄の詩人・評論家の高良勉さん、一坪反戦地主会の崎原盛秀さんといった人たちへの「インタビューシリーズ」を「情況」誌上で行ってきた。その最後は、仲里効さんへのインタビューで締めくくる予定だが、その他にも、金城あゆみさんに「沖縄日雇労働組合」の歴史を語ってもらうことを考えている。

沖縄本島中部の金武湾での石油備蓄基地・石油精製所の建設阻止に向けて住民たちが立ち上がった金武湾闘争は、沖縄では、本土の運動にとっての三里塚闘争に匹敵するような位置を占めていた。金武湾闘争に刺激されて沖縄各地の他の住民運動も生み出されていったし、また、現在の沖縄のいろんな住民運動や反基地運動のリーダーたちの中にも、そこで活動家として鍛えられたという人が少なくない。金武湾闘争の精神的な支柱であったのが安里清信という人で、彼は「海は人の母である」(晶文社)という本も書いているが、崎原盛秀さんへのインタビューの際には、安里清信をめぐる貴重な思い出話をいろいろと聞くことができた。

そうした人選にも現れているように、「インタビューシリーズ」では、知識人であると同時に沖縄で運動の現場を担っている人たちから話を聞くことを主眼に置いてきたが、そうした「語り」を通じて沖縄での思想・言論の領域と運動現場とをつなぐことを目指してきた。そこから更に、日本本土の各地域や東アジアともいかにつながるか、というところで「足踏み」しているのが現状だ。仙台の「東チモール文化センター」の中心的なメンバーの活動を私が東京で手伝っている関係で、仙台でも沖縄連帯のためのシンポジウムの企画を進めることをお願いしていたが、残念ながら、「3・11」で話が中断してしまった。また、今年は韓国で大統領選挙が行われる年だが、先日のソウル市長選挙でハンナラ党の候補者が敗北したということもあって、大統領選挙の結果によっては韓国社会が大きく変わる可能性がある。それに対して、日本の私たちも、韓国社会で今、何が論議されていて、それにどうつながることができるのかを、真剣に考えなければならない段階になってきているように思う。

□ 沖縄という「回路」を通じて日本を東アジア・環太平洋に開く

鳩山元首相の普天間基地「県外」移設をめぐるアメリカとの外交交渉の顛末(てんまつ)からも明らかのように、いわゆる「日米同盟」というのは、単なる政策合意のレベルに止まるものではなく、強固な物質的・経済的な基盤の上に成立している。そうした「基盤」をどう解体していくかということ抜きには、日本とアメリカの民衆相互の平和的な日米関係を創りだすことは不可能だろう。岩波書店の月刊誌「世界」の岡本編集長は私の知人の 1 人だが、彼とは、沖縄の問題に「突破口」を開けるためにも日本とアメリカの知識人を集めて一大シンポジウムをやろう、という話をしたことがあった。その時、彼は、「これはもう『10 年戦争』ですね」と言っていたが、実際に闘争で「血が流れる」かは別にして、私たちの側も本気になって闘うことが求められているように思う。それは、同時に、私たちが世界のあり方をいかに構想・想像するかをめぐる「思想戦」を闘うことでもあるだろう。

今日の私の話のレジュメに、「ナショナリズムについて」という項目を入れたが、沖縄連帯の運動を進めようとする際に、「沖縄ナショナリズム」をどう考えるか、という問題に突き当たることが、しばしばある。ヤマトの沖縄に対する長年に及ぶ抑圧的な関係がある以上、沖縄の運動の世界にヤマトの人

間が出入りすることを不快に感じる人がいるのは、不思議なことではない。私は幸い、そういった非難を面と向かって言われたことはないが、ただ、それが沖縄とヤマトの者たちが共同で行動を起こすのを阻むことになるのであれば、それに対してきちんと異議を唱えなければならない、と思う。川満信一さんが「琉球共和国」ではなく、「琉球共和社会」を宣言していることの核心には、沖縄にヤマトと同じような「ミニ国家」をつくったとして、それで何の意味があるか、ということがあるはずだ。むしろ、沖縄社会をいかに「開く」ということが、そこで提起されているのではないか。そうした論議を、ぜひ、沖縄の運動の現場や、ヤマトの沖縄連帯の運動の中で行っていきたいと考えている。

シンポジウム「来るべき自己決定権のために」のパネリストとして中国から参加した孫歌さんは、「竹内好という問い」(岩波書店)という本を書いているが、その中で、彼女は、竹内好の魯迅論を手がかりとして、そこから現在の私たちが何を課題として引き継ぐかを丁寧に読み解こうとしている。また、彼女は、一昨年出された新崎盛暉の「沖縄現代史」(岩波現代選書)の韓国語版と中国語版に、「沖縄に内在する東アジア戦後史」という優れた解説文を寄せている。その中で、彼女は、植民地化された民衆の帝国主義に対する抵抗のあり方を考察することを通じて、沖縄の人々の苦難の歴史につながろうとしているように思う。

私は、昨年 9 月に北京で開催されたドイツの民衆画家のケーテ・コルヴィッツのシンポジウムから戻ったばかりの仲里効さんに会いに沖縄に行き、インタビューを行った。その時に、初めて、仲里さんから、魯迅がケーテ・コルヴィッツの作品に注目して中国で木版画運動を進めていたことを聞いた。仲里さんや川満さんもそうだし、また、川満さんと同じく、沖縄の日本「復帰」前後の時期に「反復帰論」を展開した新川明も、魯迅の著作を深く読み込んでいる。そのように、植民地主義的な抑圧を経験してきた人々が抵抗のための手がかりをつかむための〈思想的資源〉として、魯迅の作品は読まれ続けてきたように思う。

孫歌さんも考察しているように、竹内好も彼なりの思いを込めて魯迅の著作を読んでいるのだが、現在の私たちは植民地支配下にいるわけではないから、魯迅を読む必要がない、とは到底言えないのではないか。日本での 100 年以上もの近代の歴史を経て、私たちが本当にどれだけ支配者から精神的にも「自立」して社会を営んでいるかと言えば、全くそうではないということ、「3・11」が否応なく明らかにしてしまった。それこそ、私たちの中に根強くある、魯迅が言う「奴隷根性」と向き合うためにも、魯迅の著作をいかに読むかが問われているはずだ。同時に、そこに、ヤマトの私たちが、中国、台湾、韓国・朝鮮といった東アジアや、沖縄の人々と共に「共通言語」をいかに生みだすか、を模索しあうための糸口があるように感じている。

ヤマトの自分たちが沖縄や東アジアとの新たな関係をどう創りだすかということと併せて、私としては、環太平洋圏での海の交通・交流を考えたい、という思いがある。普天間基地の移転先の候補地としてしばしばグアム島の名前が上がるが、「日米同盟」に象徴される現在の日本とアメリカとの関係をどう変えるか、という問題にしても、環太平洋の人たちと私たちとの民衆同士の交通・交流はいかに可能か、といった視点から考えることができるのではないか。

今年 3 月に、東チモールで大統領選挙が行われる予定だが、その候補者の 1 人は、仙台の「東チモール文化センター」が交流を続けてきた人物だ。また、私の知人の中には、フィリピンとの連帯運動を行っている人もいるし、そこまで含めて考えれば、東南アジアの大国であるインドネシアのことも視野に入れざるを得ない。単に「大風呂敷」を広げればよいということではないが、そうした大きな視野で考えていかなければ、この世界の中で日本や沖縄だけが単独で変わるということはあるまい。はるか遠い先のことではあるだろうが、そうした世界大の民衆間の連帯で、この日本の「帝国主義」的なあり方をいかに解体するか、を展望していきたい。同時に、そうした大きな展望の中でこそ、いかに私たちが福島や沖縄の人々とつながるか、を考えることができるように思う。

「フリートーク」での論議から

参加者A:この間の沖縄で、「自己決定権の樹立」ということがよく言われている。ただ、「自己決定」というのは、「小泉改革」以降、この国でも推進されてきたネオリベ政策の「合い言葉」でもあって、あたかも当事者自身の選択や「自己決定」を尊重するかのような言説を伴って、社会保障・福祉の削減や、雇用の不安定化が強行されてきた。沖縄の場合は「自己決定権」という言葉なので、それと完全に同じではないが、沖縄の運動の中でそういったことはどう考えられているのか。

川音:08年5月の「シンポジウム」の「来るべき自己決定権のために」というタイトルは、仲里効さんの提案によるものだったと記憶している。私の印象で言えば、沖縄で言われている「自己決定権」というのは、かつて、第一次大戦後に、「民族独立」という理念と対になって「民族自決」が唱えられたことに対応するものだろう。ただ、沖縄での「自己決定権」というのは、単に政治的な意味での独立ということよりも、もう少し社会的な広がりをもって使われている言葉であるように思う。現在も継続されている沖縄での植民地主義的な抑圧からの解放を求めようとする動きを、「自己決定権の樹立」と呼ぶことに対して、沖縄の運動の中で特に違和感は出されていないと思う。

参加者B:一昨年、沖縄では、「琉球弧の自己決定権の樹立へ」という檄文と、「琉球自治共和国連邦独立宣言」が相次いで出されている。前者は『琉球弧の自己決定権の樹立へ』有志連合」として出されたものだが、後者の「呼びかけ人」の一人として松島泰勝さんの名前が見られる。そのように、沖縄での「自己決定権の樹立」を求める動きというのは、単体の運動ではなく、その中には幾つもの潮流があるように思うが、富山から見ている限りでは、そうした実情はよく分からないところがある。また、「自己決定権」というのは、私としては、ネオリベというよりも、むしろ、フェミニズムや障害者の「自立運動」の流れの中で使われてきたという感じが強いが、そうした言葉で沖縄での動きを呼ぶことのプラスとマイナスの両方があるように思う。

川音:松島泰勝さんは、世界の先住民の運動との関わりを通じて、沖縄での「自立／自己決定権の樹立」を求める運動にも関わるようになった人だ。彼は、「内発的発展論」に基づいて、地域のありように即した内発的な経済発展を通じて大資本の進出を拒否することによって、地域の「自己決定権」が行使される、ということを主張している。彼のすごいところは、それを議論のレベルだけに止めるのではなく、そうした理念に基づいて、実際に沖縄の村や「シマ(地域小共同体)」の中に入って、「村おこし」・「シマおこし」をめぐって住民たちと一緒に論議をしたり、産業を起こすことに協力したりしていることだ。彼はそのような営みの上に立って反基地の運動にも取り組んでいるが、そうした内実を備えたものとして、沖縄の植民地的状況に対する抵抗のための言葉として「自己決定権」という言葉が使われるのであれば、それでいいのではないかと、思う。

参加者C:私も「フクシマ論」を読んだのだが、貧しさからの脱却の「夢」を託して住民が原発推進政策に積極的に「隷従」していった様子が詳しく書かれている。魯迅による民衆の「奴隷根性」への批判という話が川音さんからあったが、そのような意味では、魯迅の言う「奴隷根性」は、決して他人事ではない。私がそれとは対照的に思い浮かべるのは、「復帰」を目前にした70年12月の沖縄の「コザ暴動」だ。「コザ暴動」では、普段は「Aサインバー」など米兵相手の仕事で生計を立てていた人々が、米軍支配への怒りを街頭で噴出させた。開沼博が描いているように、人々の「自発的隷従」がどのように生みだされたかを見るのは大事なことだが、同時に、それを打破するためにも、私たちの中の「奴隷根性」をいかに解体するか、がもっと問われなければならないのではないかと、思う。

川音:私が思うには、魯迅が一番言いたかったのは、物事に対してははっきりと「白黒」をつけるというよりも、この世界のあり方が本当にこのままでいいかを絶えず問い続けなければいけない、ということ

ではないか。昨年是中国の「辛亥革命」の 100 周年で、それによって中国ではアジアで最初の共和国が成立したのだが、その後、軍閥が跋扈(ばっこ)する中で、孫文は「革命未だ成らず」という言葉を残して亡くなった。そうした政治的混乱につけ込んで日本が中国に侵略するという情勢の中で、魯迅は中国の民衆の解放はいかにありうるかを考えたはずだ。彼の言う民衆の「奴隸根性」への批判も、「筆誅」ではなく、そうした変革や民衆の解放に向けた実践的な「問い」としてあったように思う。

とにかく中国の民衆は自力で「革命」という偉業を成し遂げたわけで、残念ながら、日本の私たちはそうした歴史をもたないとすれば、自らの社会を変革するためにも、魯迅から学ぶことが多々あるはずだ。そうした意味では、沖縄の人たちは半ば「偉業」を達成していて、現に普天間基地の辺野古「移設」は非暴力で阻止されている。それだけで見てはいけないうだろうが、日本の戦後間もない時期の変革への「芽」が冷戦構造の中で摘まれてしまったということは間違いなくある。かつての冷戦構造が解体された状況の中で、沖縄の人々は、ヤマトより一歩先んじて、新たな世界のあり方を生みだそうとする段階に入ろうとしているのではないか、と思う。

参加者B: 先程の「自己決定」をめぐる話にもう少し付け加えて言えば、例えば、病院で医療を受ける際の「自己決定」というのは、あくまでも個人単位のことだし、逆に、障害者や女性の運動で「自己決定権」が唱えられる際には、障害者や女性がある種の「集合名詞」化されているように思う。それこそ、ネオリベで言う「自己決定」とは、まさに人間を「個人」化するものだ。

沖縄での「自己決定権」を求める動きの中で、琉球弧を構成する島や、地域の小共同体という意味での「シマ」の自治・連合によって構成されるものとして沖縄を構想する、という発想が出てきている。それは、まさに、本土に対して沖縄が1つの「集合名詞」としてあること自体を解体しようとするものではないか、と思う。そのような意味で、ヤマトの私たちが沖縄での動きに「応答」とは、私たちが日本人という「集合名詞」としてあることから脱却し、この日本国家を地域の自治に基づく島・「シマ」の連合体へと解体させることをいかに展望するか、ということでもあるだろう。

参加者D: 今日の論議の中で何度も取り上げられている開沼博の「フクシマ論」という本を私も読んだが、彼は、原発政策を推進する「中央」と、原発を誘致する福島県内の「自治体」、その間を調停する「県」という三者の関係から原発誘致・推進の構造を捉えて、非常に精緻に分析している。ただ、彼には、それを福島の人たちの「下意識」から見るという発想は無いし、福島の風土の中で人々が何を「よるべ」として生きてきたか、というところまで彼の視線は届いていないように思う。

福島を含めた東北地方の貧しい人々の土着の意識に最も肉薄したのが、いわゆる「生活綴り方運動」であったと思う。様々な限界はあったにせよ、「生活綴り方運動」では、戦前の公教育制度の中で唯一、教科としての制約のない「綴り方」の時間に子どもたちに自分の日常生活を書かせることで、人々の意識の「底」にあるものを明るみに出そうとした。一方、「3・11」以降の無数のよるべのない人たちが何を生きる「よるべ」として求めているか、というところまで含めて論じているものは、彼の「フクシマ論」を含めてあまり無いのではないか。

ところで、先程からの論議の中で、「シマ」という言葉が何度も出てきている。それに関連して言うと、「取り付くシマがない」と言う時の「シマ」とは何だろうかとよく考えるのだが、それこそ、私たちが創りだしたいのは、「取り付くシマ」ではないか。「シマ」の連合体へと日本を解体するという話もあったが、その時の「シマ」とは、実際の地域かもしれないし、人間同士の関係や共同性が成立する「場」というイメージでもあるだろう。そのような意味では、富山の私たちと川音さんのグループとの間でも、「シマ」と「シマ」との「群島」的接続ということは成立するはずだ。ヤマトの私たちと沖縄がいかに地域を仲立ちにして出会うかということが、今日の話の大きなテーマとなっているように思う。その場合の「地域」という言葉が、人々の生きる「よるべ」や「シマ」としての内実をどこまでもちうるかということが、大きく問われているのではないか、と感じている。